

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行によって全国一斉休校となった2020年4月。本市は3人に1台の割合で整備していたタブレット端末（LTE）を使って全小中学校でオンラインを活用した学習支援を行いました。授業支援アプリを使って健康観察を行ったり、オンライン会議システムを活用して各教科の学習内容を進めたり、各学校で工夫して休校中も学びが止まらないようにしたのです。その際、思いもよらない事が起きました。前年度不登校児童生徒として報告があった児童生徒の約半数がオンラインによる健康観察や課題のやりとりをする事ができたというものです。学校が再開された後も、ある中学校ではオンラインによる学習支援を続け、それがきっかけとなり登校することができるようになったという生徒もいました。

このようにオンラインによる学習支援は、様々な理由で登校できない児童生徒の支援に有効であることが明らかになりました。一方、学校が登校している児童生徒への対応をしながらオンラインで学習支援を行うことの負担が大きいことも事実です。そこで、熊本市にオンライン学習支援を行う配信拠点校を設置し、そこから市内全域にオンラインで学習支援を行う体制を教育委員会主導で構築することにしました。合言葉は「誰ひとり取り残さない教育ICTを活用したオンライン学習支援」です。

2. モデル事業開始

令和3年9月からのモデル事業スタートに向け、7月から体験の申込受付を始めました。リーフレットを作成し、各学校から全家庭へ周知してもらいました。9月のモデル事業スタート時の申込者は小学生26人、中学生42人でした。想定を超える申し込みに本支援のニーズの高さを感じました。定期的に、参加児童生徒及び保護者にアンケートをとり、成果と課題を明らかにし、支援内容もアップデートさせていきました。そして、本支援の目指すものを「心の居場所づくり」と「学習機会の保障」という2つに焦点化していきました。

3. 配信拠点校

配信拠点校は本荘小学校と芳野中学校の2校です。どちらも全校児童生徒数が数十人程度の小規模の学校で、教室に余裕があります。その空き教室に配信機材を置き、スタジオにしました。現在は6人の再任用の先生がオンライン学習支援員として、児童生徒への学習支援を行っています。図は中学校の1日の流れです。9時30分から15時00まで、お昼休憩をはさんで全てオンラインで学習支援を行います。基本的にはオンライン学習支援員が配信を行います。午後の配信は芳野中学校に勤めている先生方にも協力してもらっています。（ベシックタイム、クリエイティブタイム）

支援員と児童生徒のやりとりは基本的にZoomを活用しています。参加している児童生徒の多くはカメラオフ、ミュートの設定です。コミュニケーションはZoomのリアクションボタンとチャット、授業支援アプリ「ロイロノート」のカードのみです。支援員は児童生徒の小さな反応を見逃さず、励まします。児童生徒にとって、そのようなゆるやかな双方向のやりとりを支援員と行うことで、フレンドリーオンラインが心の居場所になっているのではないかと考えています。

「ICTを活用したオンライン学習支援」 ～フレンドリーオンライン～

熊本市教育委員会事務局学校教育部総合支援課指導主事 宮津 光太郎



教科の学習は「すらら」という学習アプリを使って一人ひとりのペースで学べるようにしています。参加している生徒の中には、中学3年生であっても小学校低学年から

フレンドリーオンライン 中学生基本時間割

時間	配信校	配信校	配信校	配信校	配信校
9:30-10:00	スタートタイム	スタートタイム	スタートタイム	スタートタイム	スタートタイム
10:00-11:00	セルフリズム	セルフリズム	セルフリズム	セルフリズム	セルフリズム
11:15-12:00	ミーティングタイム	ミーティングタイム	ミーティングタイム	ミーティングタイム	ミーティングタイム
14:00-14:45	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習	個別学習
14:45-15:00	ミーティングタイム	ミーティングタイム	ミーティングタイム	ミーティングタイム	ミーティングタイム



不登校だった生徒もおり、学習経験の個人差がとても大きく、一般の学校のように一斉授業を行うことはとても難しいです。また、毎日フレンドリーオンラインに参加をする児童生徒もいれば、午後だけ参加する者、曜日によって参加する者等、参加の仕方も違います。そのような児童生徒に対して個別最適な学びを行うためには学習アプリを効果的に活用することが最適解だと考えています。しかし、学習アプリを使えるようにするだけで、自ら学習を進めることのできる児童生徒は一握りです。そこで支援員が目標や時間を設定したり、頑張りを評価したりするなど、児童生徒の意欲を高めるような励ましを行っています。

4. 社会とつながるわくわく学習

毎月1回、熊本市内の様々な施設から配信を行っています。施設スタッフの方にゲストティーチャーを担当してもらい、オンラインで施設を見学するというものです。これまで動植物園や博物館、美術館、消防署等、様々な場所から配信を行ってきました。児童生徒は、ゲストティーチャーから出題されるクイズに答えながら楽しく参加しています。ゲストティーチャーの仕事に対する思いや、生き方に触れることのできる貴重な学びとなっています。

InspireHighというキャリア教育に関するオンライン教材も活用し、世界中の著名人の生き方を通して自分を見つめる学習にも取り組んでいます。

5. 先端技術の活用

令和4年度から文部科学省が行っている「次世代の学校・教育現場を見据えた先端技術・教育データの利活用推進事業」の実証地域に採択され、フレンドリーオンラインを基盤としてメタバースや参加状況を一元管理するダッシュボードの活用を進めています。メタバースを活用することによって、これまで支援員の先生としかつながっていなかった児童生徒が、互いに交流する場面が見られるようになりました。今年度は3Dメタバースも活用して、児童生徒がアウトプットしたものをバーチャ

〈連載テーマ②〉

「ICTを活用した教育」

ル教室内に掲示し、それらを見ながら互いに交流することができるようになりたいと考えています。また、ダッシュボードの活用により、これまで支援員や教育委員会が参加状況を取りまとめ、各学校に月1回周知していた児童生徒の参加状況を、正確かつ（ほぼ）リアルタイムで共有できるようにになり、各学校が行う児童生徒への支援が充実するものと期待しています。

6. おわりに

ありがたいことに、フレンドリーオンラインについて、他県の教育委員会等からたくさんの方の視察に来ていただいています。視察に来てくださった方からの感想で、特に印象に残っているのが「学習支援の様子を」実際に見るまでは、オンライン学習支援というものに冷たい印象を持っていましたが、支援員の先生方の温かさを見て、結局は「教育に対する熱意ある」人なのだと思えて感じました。」という言葉です。1人1台端末の普及によってオンラインによる学習支援は、技術的には全国どこでもできるようになりました。大切なのは、何を目指し、どのような支援を行っていくかということだと思っています。

最後にフレンドリーオンラインに昨年度参加した中学生のメッセージを紹介します。

「病気になる、学校に行けなくなつて最初はこれからどうなるのかなと不安で仕方ありませんでしたが、先生たちがいつも温かい言葉を掛けてくださり、居場所を作ってくださることで気持ちが救われています。感謝の気持ちでいっぱいです。」

フレンドリーオンラインについて参加した児童生徒や、その保護者からのフィードバックをもとに支援員と一緒に支援内容を振り返り、フレンドリーオンラインの今後についてディスカッションをするというプログラムをKumamoto Education Weekの中で行いました。興味がある方はアーカイブをご覧くださいと幸いです。

